



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章 17節

「わからないけど、おもしろい時代だね」

～変化できる者を育てるために～

今、学校にいる生徒たちの日常を、私たちはどれほど解像度高く想像できているだろうかと思います。生徒たちはスマホネイティブで、身体の一部のようです。リアルな友情とネット上のつながりの区別がつきにくい世界に生きている気がします。今の生徒にどんな教育を・・・。

今、私たちが直面している課題として、AIとの共生があります。単なる「便利なツールの登場」ではなく、「人間とは何か」「学ぶとは何か」という根源的な問いを突きつけられています。テクノロジーへの期待先行だったフェーズは終わり、今では、人間中心のシステム構造そのものを塗り替えようとしています。世の中が変革されるようで不安感が高まります。でも、世の中はおそらく子どもたちが社会に出る時には変革します。そうすると、世の中が求める人材像も劇的に変換されます。

私たちは長年教育現場で「マニュアルの達人」を育てていたのかもしれませんが。これまでの優等生像は、AI エージェントに最も取って代われやすい層になると言われています（※AI エージェント：指示を与えれば、人が介入することなく、自らブラウザを開き、メールを送り、資料を作成し、システムを操作して仕事を完結させる「自律的な実務者」のこと）。では、生き残る人は？ AI のやったことの責任を取り、AI には読み取れない人間心理の機微を汲み取って意思決定できる人になると思われます。

例えば、能登半島地震の際、行政の対応は平等・公平の原則を崩せないやり方でした。一方で、個別の切実なニーズに対応したのは、多くの NPO や民間企業の若者だったそうです。被災者それぞれのニーズや復興への熱量が、その人たちに共感され、クラウドファンディングやボランティアの行動へと変わったのです。行政の平等性とは異なる、個人への「共感」が課題解決の強力なエンジンとなりました。この「共感のネットワーク」を使いこなしているのは今の若者です。今の若者は、「ネットという武器」を使い、リアルな世界での経験と融合させて、自分のやりたいことを実現できるよう。そう考えると、私たちは、学校という環境を「共感する力」を育む場所であったり、経験を手に入れる場所にすることを意識するということになります。

以前、「壁を階段に変える力」という話をしました。これからは、相手の気持ちを推し量る「想像力」と、柔軟に受け入れる「共感力」が重要になるという話です。この力を付けるには自らの経験を深くしていくしかないということ、経験する中で壁に必ずぶつかるということ、だから「壁を階段に変える力」が・・・という話です。

こういう変革の話をする、私たち教師や保護者の不安や戸惑いを生みます。「これまでの成功法則は通用しない？」「AI を使わせると学力低下？」「我が子は変化に耐えられる？」・・・当然だと思います。でも、間違いなく言えるのは、「親が安心できるルールを敷くことより、ルールがなくても歩ける足腰を育てる」ということになるのです。

どんな教育が想像してみます。泥にまみれても他者を助ける「共感力」、うまくいかなくて、みんなで落ち込んでも、それでも次の問いを探す「泥臭い粘り強さ」、これは、いわゆる「非認知能力」です。AI 時代に最も価値が高まる力になるのです。

私たちは、今の子どもたちに対してどう語っていくか。まずは、教える・教えられるという壁を取り払い、学校を共に学ぶコミュニティにする。そして、私たちは子どもたちに「わからないけど、おもしろい時代だね」と一緒に面白がる姿を見せていくことだと思います。この姿勢が、先の未来を明るく照らすと思います。進化論のダーウィンの「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き残るのでもない、唯一生き残るのは変化できる者である」という言葉は有名です。そのマインドセットをしていきましょう。

(学校長 重枝 一郎)